ヘレニズム村落の構造を探る

―エジプト・イドゥク湖沿岸コーム・アル=ディバーゥ遺跡の考古学調査(2021)―

長谷川 奏 早稲田大学・東日本国際大学客員教授

西本 真一 日本工業大学建築学科教授

恵多谷雅弘 東海大学情報技術センター研究員、事務長

Survey on the Site Plan of the Hellenistic Village: Archaeological Research at Kom al-Diba', Waterfront of Lake Idku, Egypt (2021)

HASEGAWA, So Visiting Professor, Waseda University and Higashi Nippon International University NISHIMOTO, Shin-ichi Professor, Nippon Institute of Technology ETAYA, Masahiro Researcher and Bureau Chief, Tokai University Research and Information Center

1. 西方デルタ地域の研究史

エジプト西方デルタ調査隊は、現在、エジプト西方 デルタの潟湖(イドゥク湖)のほとりでヘレニズム時代 の村落調査を進めている(図1)。この地域は、第26 王朝が建設したギリシア人の交易都市ナウクラティス と、地中海沿岸の海運を一手に担ったカノプスとを結 ぶナイル支流が走っていた場にも近く、同王朝の強い 影響下にあったと推測される。アレクサンドリアが建 設されてからは、当該地は首都圏に近接した場として、 外来政権が地域権力を掌握する過程での最初期の重要 拠点であったと思われる。伝統的なヘレニズム古典考 古学では、低地はその生産性の低さから重要性が見過 ごされてきた地域であるが1)、近年では各国隊の調査 が進み、アレクサンドリアの後背地全体の歴史像が変 わりつつある。

2. 研究対象地域の地理的特徴

エジプトの地中海沿岸では、前5000年頃の海進に より塩基性土壌が残されて、集約的な麦作が困難な場 となった。当該地の地理的な特徴を見ると、南北軸 (VW)では海洋~砂丘~潟湖~緑地と続く偏差の大き な環境の場が経済活動の舞台となり、一方、平坦な平 野が続く東西軸(XY)の地勢は生活文化の型が一様に 拡散する場となったであろう(図2)。民俗誌を総合す ると、これらの地域の潟湖民は、塩分に強い作物栽培 (ゴマ、ウリ等)、漁業(海水域ではボラ、サヨリ、淡 水域ではナイルパーチ、コイ、ナマズ等)や野鳥の捕



図1 西方デルタの主要遺跡と研究対象地域

獲(ウズラ、サギ等)、葦織り等の製造業等、脆弱な生 業を取り結んだ生業複合を営んだと推測される。私た ちがコロナ衛星画像を利用して検証したように、当該 地域に広く分布する砂丘の頂部に形成された集落が経

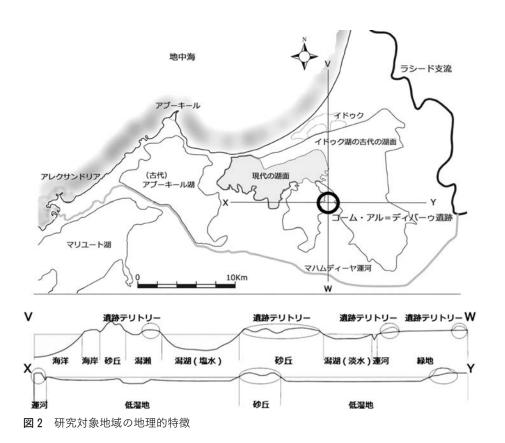
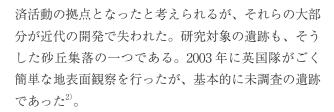




図3 微地形測量風景(北丘陵)



3. 遺跡における分布調査と探査の成果

コーム・アル=ディバーゥ遺跡は南北二つの丘から なるが、集落遺跡と思われる南丘陵は6haを測り、 丘の頂部は麓から 10 m ほどの標高差を測る。微地形 測量の後、磁気探査(GRAD601を使用)を行ったとこ



図4 磁気探査風景(南丘陵)

ろ(図4)、南丘陵の頂部では、ヘレニズム時代に建造 されたと推測される祭祀施設ナオス(Naos)を中心に 形成された神殿周域住居(Temple Precinct)が捕捉さ れた3)。探査画像は、日乾煉瓦住居が密集した集落を 示していると思われ、さらに家屋・竈等の施設・家畜 小屋・倉庫・広場・街路等が含まれていると考えられ る。集落は丘の南~西側に集中しており、概ね東西方 向よりやや傾く規則的な軸線を有す。さらに丘陵の北 部には、内側に矩形の施設を持つ方形の大規模遺構が 判読される(図5)。地表面に分布する遺物(ローマン ランプ、東方シギラータ土器、アンフォリコス等)の

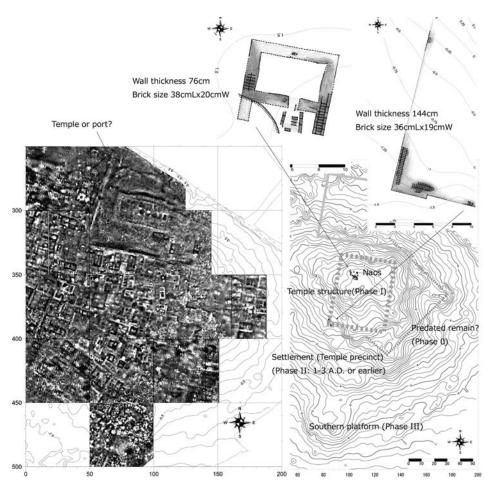


図5 探査図と推測される遺構の分布



図6 試掘作業風景

年代から、集落の最も活発な活動時期は、ローマ時代 (後1~3世紀)にあると推測された。また丘の麓の南 側部分では、住居の軸線がやや北側に傾くが、ここに は多くの焼成煉瓦片が分布しており、ビザンツ時代に 年代づけられた。さらには、これらに先行した建造物 が埋没している可能性もある。このように、対象遺跡 の概要が探査により垣間見られたことにより、分布調

査を終えて、発掘調査に移行する運びになった。発掘 調査時に利用する遺物収納コンテナの設置場所には、 建設前に事前の試掘が必要なことから、2019年と 2021年にトレンチ発掘を完了し⁴⁾(図6)、2022年から は発掘調査が始まることとなった。

4. 来期から始まる発掘調査の展望

これらサーベイの積み重ねの成果をベースに、コー ム・アル=ディバーゥ遺跡周辺(図7)の景観復元(図 8) や、同遺跡東側(ラシード支流までの氾濫原)(図9) の景観復元(図10)も始まっている。発掘調査では、 これらの研究成果で得られたプランの中でも最も重要 なポイントを発掘で検証する手法をとることにより、 イドゥク湖南域に形成された村落の構造と規模を効率 的に把握していきたい。これによって、全面発掘に よってかかる時間と経費が大きく節約された中で、研 究対象遺跡の具体的なイメージが得られ、発掘で得ら れた出土遺構と出土遺物の分析によって古代潟湖民の 生活文化が実証的に把握されるであろう。



図7 南丘陵から北丘陵を俯瞰する景観

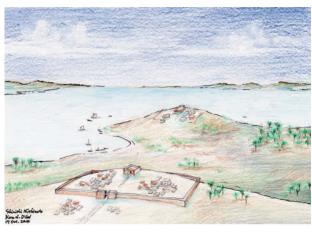


図8 遺跡周辺の景観復元図(西本真一画)

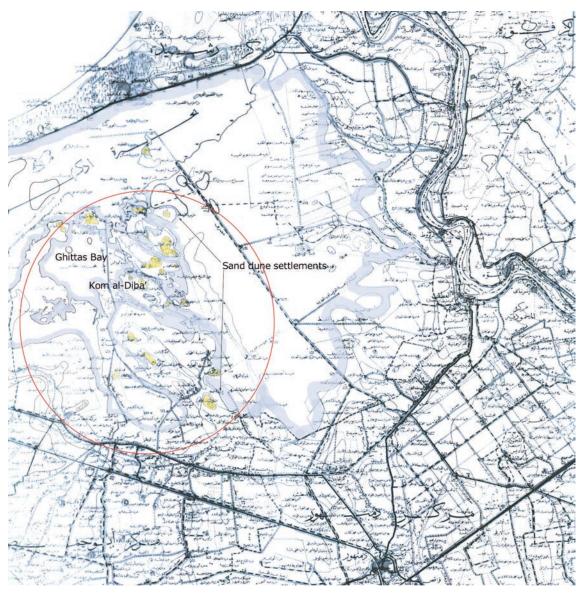


図9 遺跡東側(ラシード支流まで)の微地形



図10 遺跡東側の景観復元図(西本真一画)

■註

- 1) Απο δε Σχεδιας αναπλεουσιν επι Μεμφιν εν δεξια μεν εισι παμπολλαι κωμαι μεχρι της Μαρειας λημνης, ων εστι και η Χαβριου κωμη καλουμενη.「スケディアからメンフィスに向って遡行すると、 右側にはマレア湖(マリユート湖)に至るまで多くの村があり、 そこにはいわゆるカブリアの村がある。」Strab.17.1.23(C803) ストラボンのこの記述は、カノプス支流を船で渡る際にこの研 究対象地区の近辺を通過した際に記したものだが(カブリアは 現在の Abu Hummus あたりか)、北側に広がる砂丘景観は詳述 されていない。
- 2) 英国隊によれば、北丘陵は王朝末期の時代層を含む可能性もあ るが、中心的な年代はプトレマイオス朝後期からローマ時代を 推測し、墓地か港施設があった可能性を報じている(Wilson 2012 op. cit. 111) o
- 3)ナオスの横幅は約660cm、壁厚は76cmで、煉瓦規格は $38 \, \text{cm} \, \text{L} \times 20 \, \text{cm} \, \text{W}$ である。ナオスは横長の部屋を南面させた 一室構成であり、入口の位置は中心から若干東側にずれている。 壁体の厚さも煉瓦2枚分で、小規模の建物としては重厚な作り である。また丘の中腹からは、煉瓦規格は36cmL×19cmW の煉瓦4枚分の堂々とした厚みを持つ壁(144 cm)が発見され、 丘の頂部のナオスを取り囲む周壁をなすと考えられた(西本 他:pp.7-8)。
- 4)トレンチ調査では、堆積層の下層から、ヘルメス神のカドゥケ ウスの杖と Ευκλειτου と刻されたロードス島アンフォラの把手

(BC2-1C)など、この遺跡の形成年代を考える重要な資料も得 られている。

■参考文献

- · Blue, L.K. 2010 Lake Mareotis, Reconstructing the Past: Proceedings of the International Conference on the Archaeology of the Mareotic Region held at Alexandria University, Egypt 5th-6th April 2008, Southampton.
- · de Cosson, A. 1935 Mareotis, London.
- · Hairy, H. (ed.) 2009 Du Nil à Alexandrie: Histoires d'Eaux, Paris.
- · Hasegawa, S. and S. Nishimoto 2019 Lost landscape of the waterfront on the Mediterranean coast of Egypt: East of Lake Idku. In S. Nakamura, T. Adachi, M. Abe (eds.), Decades in Deserts: Essays on Western Asian Archaeology in Honor of Sumio Fujii, 329-336. Japan, Rokuichi Shobou.
- · Kenawi, M. 2014 Alexandria's Hinterland, England.
- · Mahmud Bay 1872 Mémoire sur l'antique Alexandrie: Ses fauborgs et environs decouverts, par les fouilles, sondages, nivellments et autres recherches, Copenhague.
- · Tousson, O. 1934: Aṭlas tārīkhī: al-aṣfal al-'arḍ (al-wajh albaḥrī), al-Qāhira, 1934.
- · Wilson, P. and D. Grigoropoulos 2012 The West Nile Delta Regional Survey, Beheira and Kafur el-Sheikh Provinces, London.
- · Wizāra al-thaqāfa wa wizāra al-ittişālāt wa ma'lūmāt 2002: Mashrū'nizām al-ma'lūmāt al-jughrāfī: aṭlas al-muwāqi'alāthārīya bi-muḥāfiza al-Buḥaira 3, al-Qāhira.
- ・惠多谷雅弘・中野良志・下田陽久・長谷川奏・エルサイード アッバスザグルール 2013「多衛星データを用いた古代エジプ ト遺跡 Site No.52 の発見について」『写真測量とリモートセン シング』52-4号 200-206頁 日本写真測量学会。
- ・岸田徹・長谷川奏・津村宏臣・竹内俊貴・茂木孝太郎 「磁気 探査と地中レーダー探査によるエジプト・アラブ共和国コマル ディバー遺跡の調査研究」文化財科学会第32回大会、東京学 芸大学、2015/7/11~12(ポスターセッション)。
- ・西本真一・長谷川奏 2015「エジプト西方デルタ、コーム・ア ル=ディバーゥの建造物(1)」『日本建築学会梗概集日本建築学 会』7-8頁 日本建築学会。
- ・長谷川奏 2016「地中海、砂漠とナイルの水辺のはざまで一前 身伝統と対峙した外来権力の試み」水島司(編)『環境に挑む歴 史学』308-322頁 勉誠出版。